

豊山学報・第六六号
弘法大師御生誕千二百五十年
記念特別号 抜刷
令和五年三月発行
真言宗豊山派総合研究院

鎌倉期における真言法流の北関東への伝播

―下野国医王寺を事例に―

風間弘盛

鎌倉期における真言法流の北関東への伝播

—下野国医王寺を事例に—

風間弘盛

はじめに

真言法流が東国に流入し始めたのは、平安時代畿内より流人が流されたことにより、伊豆に早くから真言宗が伝わったとされる。現在の熱海市にある伊豆走湯山（現伊豆山神社）は、鎌倉幕府の創立以前から、関東における真言密教の拠点であり、幕府創立後は源頼朝（二四七〜二九九）によって保護を受けた。^①

関東において真言宗が劇的に展開するきっかけとなったのは、鎌倉幕府の創立である。政治的勢力が関東鎌倉に出現したことは、当時の政治と宗教が不可分であったことを考えれば、真言密教がこれをきっかけに展開するであろうことは当然であった。

治承四年（一一八〇）、鶴岡八幡宮寺が源頼朝によって創建されると、多くの名僧が京都より招かれた。現在神社となっている鶴岡八幡宮は、供僧二十五口がおかれた寺院であり、その供僧には東密・台密双方の僧侶が任命され法要を執行していた。^②

また醍醐寺三宝院流成賢流の祖・成賢（一一六二～一二三二）は、多くの資に瀉瓶し、さらに多くの法流を生み出す。中でも意教上人頼賢（一一九六～一二七三）は、幕府の招きで鎌倉常楽寺の開山となり、その弟子慈猛（一二二二～一二七七）は、下野薬師寺を中心に活躍した。さらにその法流は、下野国小俣鶏足寺頼尊（一二四四～一三二六）に伝えられ、その法灯は関東各地に栄えた。⁽³⁾

また同じく頼賢の弟子願行上人憲静（？～一二九五）は、鎌倉大乗寺の公珍に瀉瓶し、その法灯は武蔵など関東南部に広まった。また憲静より法を受けた、伊豆妙静上人宥祥の流れは、常陸に伝わり、佐久山方として当地で栄えた。⁽⁴⁾

宥祥は教学面においても知られる。大日経の研究に生涯をささげ、京都からも高い評価を受けた。宥祥の教学を伊豆教学・伊豆の伝という。宥祥の弟子に宥甦・源暹らがいる。宥甦は常陸国佐久山浄瑠璃光寺に止住し、宥祥の伊豆流教学を伝えた。宥甦の資には高野山の学匠宥快がいる。源暹については詳しく分からないが、東寺の学匠頼宝・杲宝（一一三〇六～一一三六二）に影響をあたえた。

関東に広まった法流は他に蓮念（仁寛）の立川流、西大寺流の忍性（一二一七～一三〇三）などの流れが伝わった。特に鎌倉では多くの真言僧が一時止住したり、長く拠点構えた。光宝方の光宝（一一七七～一二三九）、報恩院流系統の佐々目流の守海（一二〇七～一二六六）、随心院流の厳海（一一七三～一二五二）・厳惠等、忍辱山の定豪（一一五二～一二三八）、金剛王院流の実賢（一一七六～一二四九）・勝円（一二三〇～一二七八）などである。⁽⁵⁾

このように関東においても、鎌倉幕府成立以降、多くの真言僧が下るようになり、それらの僧侶や、その法流を受けた僧侶が、関東に拠点を構えて、関東の多くの真言密教寺院の基をなした。

今回はそれらのことを念頭に置き、京都から鎌倉へ、そして鎌倉から北関東の寺院へ伝わっていた史料を示しながら、中世北関東における真言密教僧そして聖教が往来していった過程を見てみたい。

一、称名寺聖教「三珍」、「三六代子」に見られる法流授受

次の史料は、金沢文庫所蔵の称名寺聖教類のうち、鎌倉大門寺において、定融と空円という僧侶に関係した聖教、「三珍」「三六代子」上・下の奥書である。

まず「三珍」は三宝院流の「三宝」の事と思われる。内題に「三珍宛相承事」とあり、三宝院流相承のことを記した聖教であり、その内容は、三宝院定海が、弟子の元海の質問に答える形式となっている。この「三珍」については、櫛田良洪氏が触れているが、詳らかに検証はしておられない。

外題「三珍」内題「三珍宛相承事」（称名寺聖教二八九函二五号）

（末尾）書本二云

乾元元年八月一日、於鎌倉大門寺

以宗大事、授空円上人畢

前權僧正定融七十六才

仰云、此事非嫡弟者、不可聞名字也云々

次に「三六代子」は、醍醐寺勝憲（勝賢）が守覚法親王に授けたなどの文言や、実賢の名前が出てくる内容である。そのことから、醍醐三宝院流系統の金剛王院流の聖教であることが分かる。次にその奥書を掲げる。

「三六代子」上（称名寺聖教二八九函二八号一）

（末尾）御本云

御目録

乾元二年於大門寺、已上大事等

空円上人奉授了、

在御判
七十

權僧正定融生年

五歳

御本云

乾元二年^{卯癸}三月廿七日、賜師主御

本而、於千秋寺一夜^ニ馳筆了、

晴空四十二才

元亨三年十月二日、已上

大事等定俊上人奉授畢

金剛佛子定空

生年五三

（花押）

元亨三年 九月十五日書寫了、

雖五日賜之、且那祈禱一七個日

承之間、日數延引也

賜師主御本、於伴田寺客坊寫之了

定俊

一交了、

「三六代子」下（称名寺聖教二八九函二八号二）

（表末尾）御本云

御自筆

乾元二年三月晦日、於大門寺

空円上人奉授畢

前權僧正定融

在御判

元亨三年十月日、於醫王寺

已上定俊上人奉授了

佛資定空

法才廿七夏

（花押）

（裏末尾）御本云

乾元二年卯癸三月廿八日亥刻

賜師主御本寫之了

晴空六七才

一 交了 定俊

これらの三点の奥書のうち乾元年間の記事を年表にすると次の表一のようなになる。

表一

年号	西暦	事項	史料
乾元元年	一三〇二	八月一日、定融が鎌倉大門寺において宗の大事を空円に授ける	「三珍」
乾元二年 (嘉元元)	一三〇三	三月二十七日、晴空、師主の御本を、千秋寺において書写する	「三六代子」上
乾元二年	一三〇三	三月二十八日亥刻、晴空、師主の御本を書写する	「三六代子」下
乾元二年	一三〇三	定融、大門寺において空円に授ける	「三六代子」上
乾元二年	一三〇三	三月晦日、定融、大門寺において空円に授ける	「三六代子」下

と以上のようなになる。

二、定融について

次に、前掲史料に出てくる人物、定融について探ってみたい。

表二（『真言宗全書』第三九巻所収の史料は、頁数と上下段のみ記載）

年号	西暦	事項	史料
安貞元年 または 寛喜元年	一二二七 または 一二二九	寺門派阿闍梨兼尊律師の真弟子として生まれる	『尊卑分脈』
正嘉二年	一二五八	大門寺僧正定清より、三宝院方金剛王院流定清方の灌頂を受ける	二四四頁下段
正元元年	一二五九	九月二十八日から、弘安二年（一二七九）七月八日までの間の、定清が開壇した灌頂に、役僧として十回出任する	二四五頁下段 ～二四九頁下段
文永二年	一二六五	三月一八日、大門寺において、「請書領状抄」を写書し、「己灌頂権律師定融」と記す	「請書領状抄」（称名寺聖教三二四函四一号）
同	同	四月二〇日、大門寺において、「掌内略要抄」を写書し、「己灌頂権律師定融」と記す	「掌内略要抄」（称名寺聖教二一八函七号）

文永四年	一二六七	定清より忍辱山流受法	二四八頁上段
建治二年	一二七六	九月一六日鎌倉大門寺灌頂堂において、勝円が定意に授けた灌頂で、僧都定融が教授を務めている。また年未詳ながら、勝円より重受している	二七三頁下段 二七三頁上段
弘安三年	一二八〇	大門寺定清、寂す	
正応三年	一二九〇	四月二五日、佐々目御影堂において、頼助が頼演に授法する。 定融は護摩師	二九一頁上段
正応六年	一二九三	五月五日、佐々目御影堂において、頼助が頼什に授法する。 定融は護摩師	二九二頁下段
年未詳		年未詳ながら定融法印、頼助より重受	二九二頁上段
乾元元年	一三〇二	権僧正定融、鎌倉大門寺で授法活動	表一
嘉元二年	一三〇四	七月六日、卒去七六または七八歳	二九二頁上段

定融は、『尊卑分脈』⁽⁷⁾によると、天台寺門派阿闍梨兼尊律師の真弟子として生まれた。生年は「三珍」に乾元元年（一三〇二）八月一日の時に七十六歳とあり、「三六代子」上には乾元二年（一三〇三）七十五歳とあるので、安貞元年（一二二七）か寛喜元年（一二二九）の生まれとなる。曾祖父の藤原尹通（一〇八一〜一二二二）は正五位・左衛門権佐に叙任された平安後期の貴族なので、定融も京都近辺の生まれと思われる。

いつの頃からか、鎌倉で活動を始め、正嘉二年（一二二八）定融三十歳頃の時、大門寺僧正定清（一一八五〜一二八〇）より三寶院方金剛王院流定清方の灌頂を受ける⁽⁸⁾。また、金剛王院流に関していえば、勝円より金剛王

院流を重受している。

文永四年（一二六七）四十歳頃、同じく定清より忍辱山流を受けている。⁽⁹⁾ 定清の正嫡であり、権僧正に任じられ、鎌倉大門寺で伝授を行っている。

大門寺は先学によると、鎌倉大倉の地にあつた真言寺院で、大倉阿弥陀堂とも言う。有力御家人後藤氏と関係が深い寺院⁽¹⁰⁾で、定融の師、定清は、『尊卑分脈』⁽¹¹⁾によると、御家人後藤基清の子である。定清は大門寺別当であつた。

「忍辱山幸心血脈」には、「又定豪、定清、定融以来定関東有之」とあり、関東における一流をなしており、⁽¹²⁾定融も定清も「定」の字が示すように、鎌倉から畿内の東密仏教界に威を振るつた定豪⁽¹³⁾に連なる一門であつた。定豪の有力な後継者だつた定親が鎌倉から追放されると、定清は鎌倉における東密を支える人物として活動した。また仁治三年（一二四二）醍醐寺実賢が、鎌倉に下向すると、定清は実賢と強く関係を構築し、その金剛王院流の灌頂弟子となり、自らも定清方の祖として、三宝院流を三十四名に、忍辱山流を二十二名に伝えた。⁽¹⁴⁾定清亡き後の大門寺別当は、定融がなつたと思われ、その法流を大門寺を拠点に盛んに伝えた。「三珍」も「三六代子」も、定清より定融に伝えられた、大門寺の三宝院（金剛王院）流の聖教なのであろう。定融は嘉元二年（一二〇四）七月六日卒去している。⁽¹⁵⁾

三、空円・晴空について

次に「三珍」と「三六代子」に登場する人物のうち、空円と晴空について述べたい。空円と晴空は何者か。晴空が書写した「三六代子」上下は、それぞれ「伴田寺」「醫王寺」に伝来していることがわかる。『江戸幕府

寺院本末集成』⁽¹⁶⁾によると、これに該当する寺院に下野国都賀郡半田村医王寺がある。

同寺の宝永七年（一七二〇）に編纂された「下野国都賀郡半田村醫王寺住持代數帳」⁽¹⁷⁾に、

下野国都賀郡半田村

醫王寺住持代數帳

開山隆印比丘

第二晴空比丘

第三定空比丘

（後略）

とあり、晴空は第二世とされている。さらにこれより確実な史料として、医王寺吉祥天立像納入品に、晴空直筆の「金光明最勝王經 卷八大吉祥天女品・同大吉祥天女增長財物品」が収められており、その奥書に、

正和二年^{丑癸}十一月六日、為利益有情、此經文可奉

籠大吉祥天女御身中也 空円坊晴空^{丑癸}

法夏十九

とあり、正和二年（一三三三）五十二歳の空円坊晴空が、医王寺吉祥天に「金光明最勝王經」を収めていることがわかる。即ち空円とは晴空の仮名である。

また「三六代子」上と下によつて乾元二年（一三〇三）の年齢が「四十二歳」と「六十七歳」の二通り出てくるが、「四十二歳」が正しいことがわかる。正和二年で「法夏十九」とあることから、乾元元年の頃の晴空は、法暦九年となり、出家得度してから、それほど年数を重ねておらず、僧侶として浅いことも分かる。

この事から乾元元年（一三〇二）から二年にかけて晴空が鎌倉大門寺の聖教を書写し、晩年の定融から伝授を

受けていたことがわかる。

その他晴空は、「灌頂五重決疑」（称名寺聖教二九八函八号）に、

晴空（表紙左下）

永仁五年丁酉十一月廿三日於武州諸塚書了

晴空

とあり、永仁五年（一二九七）十一月二十三日、武蔵国諸塚において、「灌頂五重決疑」を書写しており、鎌倉以外での書写活動もうかがえる。

千秋寺については不明な点が多いが、鎌倉内か近郊の寺とされる。また、鎌倉大楽寺が千秋寺ではないかという説もあるが、確定は出来ない。⁽¹⁸⁾ 金沢文庫所蔵「言説集」⁽¹⁹⁾には「千秋谷」という地名が出てくる。千秋寺との関連も考えられる。

「二六代子」上下ともに、千秋寺で書写されたと考ええるならば、乾元二年三月二十七・二十八日の両日で書写を終わり、同月晦日に大門寺で伝授を受けたと考えられ、鎌倉内か近郊という説に合致する。

四、晴空書写聖教の下野医王寺への伝来と称名寺への環流

晴空が、鎌倉大門寺の聖教「三珍」「三六代子」そして武蔵国諸塚で書写した「灌頂五重決疑」の動きについて考えたい。

下野国都賀郡半田医王寺に伝来した「三六代子」は、「於伴田寺客坊寫之了 定俊」とあるように、元亨三年（一一三三）九月十五日、定俊が伴田寺即ち医王寺の客坊において書写しているのがわかる。

また「元亨三年十月日、於醫王寺 已上定俊上人奉授了 佛資定空」とあるように、十月それらの聖教の内容を、定空が定俊に伝授していることもわかる。

書写し伝授を受けた定俊については、詳細は不明だが、伝授をした定空は医王寺第三世とされ、晴空の後継住職とされる人物である。つまり晴空が書写した聖教は下野国半田医王寺の聖教として伝来し、それを受け継いだ医王寺第三世の定空によつて伝授されていた事がわかるのである。⁽²⁰⁾

京都から鎌倉に伝えられた聖教とその教えが、さらに鎌倉で書写・伝授され北関東の寺院へ伝来し、聖教とともに、その教えを理解する僧侶がいたことがわかる。

これらの聖教は現在医王寺には存在せず、金沢文庫にあるので、医王寺からさらに金沢称名寺へ伝来したのであろう。医王寺で書写し伝授を受けた定俊が、称名寺にもたらしたのかも知れない。

おわりに

以上、京都醍醐寺実賢↓鎌倉大門寺定清・（勝円）↓定融↓下野国半田医王寺晴空・定空・定俊↓金沢称名寺と、聖教が伝来し、また僧侶が行き来していたことが分かる一例である。

このように真言密教が北関東に伝来する素地として、その地方における檀越の存在が上げられる。「三六代子」上には「旦那祈禱」とあり、この旦那が定俊の旦那なのか、医王寺定空の旦那なのか不明だが、御家人などその地域の有力者であることは間違いない。その様な寺院を後援する檀越の宗教的要求に応えるためにも、僧侶

としてのキャリアを向上させることが必要であった。そのためにも鎌倉で聖教を書写し、学匠について学び、また田舎寺院でも聖教を集積し、それを理解する僧侶が必要とされていたことがうかがえる一文でもある。

註

- (1) 柳田良洪 『真言密教成立過程の研究』 四八二頁、一九六四年、山喜房仏書林
- (2) 柳田良洪 『真言密教成立過程の研究』 四八八頁、貫達人『鶴岡八幡宮寺』三三〜三四頁、一九九六年、有隣堂
- (3) 小此木輝之 『中世寺院と関東』 三三三頁、二〇〇二年、青史出版
- (4) 柳田良洪 『真言密教成立過程の研究』 五〇三頁、内山純子『常陸における真言宗の展開』（『東国における仏教諸宗派の展開』一九九〇年、そして）、佐久山方と醍醐寺末の真言宗（『茨城県史中世編』一九八六年、茨城県、坂本正仁、「中世関東における真言宗教団の展開―常陸・北下総の実勝方の場合―」（『日本仏教史学』第二十号、一九八五年、日本仏教史学会）
- (5) 平雅行 『鎌倉真言派の展開―随心院流を中心に―』（『人間文化研究』 四七、二〇二一年、同「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶―良諭・光宝・実賢―」（『待派の成立・展開―』（『人間文化研究』 四五、二〇二〇年、同「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶―良諭・光宝・実賢―」（『待兼山論叢史学篇』 四三、二〇〇九年、柳田良洪『関東における東密の展開』 『真言密教成立過程の研究』 四八一頁以下
- (6) 『真言密教成立過程の研究』 六五六頁、一九六四年、山喜房仏書林
- (7) 『尊卑分脈』 第二篇、四八五頁
- (8) 『血脈類集記』 『真言宗全書』 第三九卷、二四四頁下段
- (9) 『血脈類集記』 第十一、『真言宗全書』 第三九卷、二四八頁上段
- (10) 高橋慎一郎 『中世鎌倉における將軍御所の記憶と大門寺』（『中世都市の力』 二〇一〇年、高志書院）
- (11) 『尊卑分脈』 第二篇、三九四頁
- (12) 『野澤血脈集』 『真言宗全書』 第三九卷、四三五頁上段
- (13) 定豪の経歴を、先学（上田敍代『鎌倉止住僧定豪について―その系譜と寺職獲得の経過の検討―』（『学習院史学』 第三三号、一九九五年三月）、平雅行『定豪と鎌倉幕府』（大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』 清文堂出版、

一九八八年）により述べると、広沢六流忍辱山流の第三祖。定豪は醍醐源氏の中でも傍流であり、仁和寺の「遠所別院」忍辱山を継承した。建久二年（一一九一）定豪四十歳のとき鶴岡八幡宮供僧に任じられ、承久元年（二二一九）三代将軍源実朝が殺害された事件を契機に、承久二年鶴岡八幡宮別当に任命され、一躍仏教界の重要人物となった。のち大伝法院座主や東寺一長者を勤め、勢力を振るった。

- (14) 平雅行「定豪とその弟子―鎌倉真言派の成立・展開―」『人間文化研究』四五号、二〇二〇年
- (15) 「血脈類集記」『真言宗全書』第三九卷、二九二頁上段
- (16) 『江戸幕府寺院本末集成』中巻、一六一〇頁
- (17) 医王寺文書イ一一五
- (18) 貫達人・川副武胤著『鎌倉廃寺事典』一一八・一四三頁、一九八〇年、有隣堂
- (19) 金沢文庫所蔵称名寺聖教二七四函一五・二八、神奈川県立金沢文庫『五寸四方の文学世界―重要文化財「称名寺聖教」唱導資料目録―』二二五頁）には「千秋谷」という地名が出てくる。千秋寺との関連も考えられるが、課題としたい。
- (20) ただし、医王寺はいつからか、中世の間、鶏足寺の慈猛意教流を相承する。